「発見カード」の活用による書くことの日常化

熊本大学
河野　順子

一　「発見カード」とは

私が公立小学校に勤務していた頃、子どもたちの側に学びが定着しないことに悩んだ時期がある。どうしたら子どもの問題意識から授業を出発していくことができるのかという悩みの中から、試行錯誤の結果、「発見カード」を取り入れることにした。

これは、毎時間の授業終了後、三～五分間をとって、子どもたちがその授業を振り返って、発見したこと、わからなかったこと、新たに生まれてきた疑問などを書き込むためのカードである。

はじめは、個人カルテを活用していたのだが、教師の側と子どもの側からそれぞれ次のような問題点が出てきた。

まず、教師側の問題である。個人カルテでは毎時間、到達目標を設定し、評価項目を明示し、そこへ向けて情意面も含めた形成的評価を行っていた。そうした個人カードを通して、教師側は客観的なデータとして子どものつまずきを把握することはできた。しかし、子どもが授業の中で何に興味を持ち、何につまずき、何を発見し、何をこそ学びたいのかという子どもの思いは把握することができなかった。

次に、子どもの側の問題として、教師が設定した評価項目は、必ずしも子ども自身が自分の学びの実態を実感として捉えることにはならず、次なる学びへ主体的に取り組む力や意欲が十分には子ども自身に自覚化されなかった。

そこで、子どもが自らの学びの状況を自らの言葉で記録し、綴っていくことの必要性を痛感したのである。

結局、行き着いたのが、「発見カード」という罫線だけのB5サイズのシンプルな用紙スタイルである。この発見カードの活用は、私が実践現場にいる間ずっと続けた。そして、大学で教えている今も活用している。小さな用紙の中に、子どもの、学生の息づかいまでが聞こえてくるようで、固有名詞に向けて、自分の授業の意味を問い返すことができる。それは、書くことの日常化という点でも効果的であった。

前述したように、子どもたちは、この「発見カード」に、発見したこと、わからなかったこと、新たに生まれてきた疑問などを書き続けていく。

このように「発見カード」に書き続けることは、子どもたちにとって自らの学びをメタ認知するという振り返りの役割を果たしている。この振り返りによって、学びが深化、発展していくことが重要なのである。

二　書き続けられる「発見カード」を起点とした学びの創造

一方、教師である私は、子どもたちの書いた「発見カード」から学び、『国語通信』を書き続けていった。

次にその実例を示してみたい。小学校三年生の説明的文章教材「くらしと絵文字」（教育出版）で生まれた「発見カード」をめぐる

記述である。（詳細については、拙著『〈対話〉による説明的文章の学習指導―メタ認知の内面化の理論提案を中心にして―』（二〇〇六年、風間書房を参照）

資料1

発見カードは大切！

一時間の授業のさいごに、発見カードを書いていますね。発見カードは、友だちの発表と自分の考えをくらべて、新しくわかったこと、考えがふかまったこと、かわったこと、発見したこと、新しく生まれたぎもんを書いていくものですね。／この発見カードを見ると、その人の学びのあり様がよくわかりますよね。／次の人たちは、きのうのじゅぎょうから、筆者は自分の言いたいこと（考え）を読む人に伝えるために、れいを出しているという筆者の考えとれいの関係をとらえることができました。そして、ようてん（大切なこと）をとらえるには、この筆者の考えとれいの関係を読みとることが大切なことを発見しています。

私は、琢己くんの発表で発見しました。琢己くんは、②だんらくのさいしょ（ふで屋さんやのこぎり屋さん）というのはれいなんだと発表しました。私は、その発表かられいが書かれているのは②だんらくの要点をわかりやすく書くためだと考えました。なるほど！と思いました。（彩花）

琢己くんの意見の②だんらくは最しょにれいがでているという発表から絵文字は～のですが本当にようてんだということがわかりました。（私はれいがようてんだとも半分思っていたので）／みんなのいけんをきいて、三だんらくのさいごはれいだということを発見しました。（久実）

私は、琢己くんの発表で発見したんだけど、それは、かならず説明を書くときに、前か後ろにれいがあるということです。それにれいがあるとああなるほどとぐたいてきにわかって大切だからです。（美希）

このほかにも、次のように、友だちの発表から、考えが深まったり、かわっていったりした人がいます。

わたしは、思ったことなんだけど、②だんらくがないとダメだと思います。／それは太田さんはなにをつたえようとしているのかわからないし、要点がわかりにくくなると思います。（陽子）

ぼくは、優さんの発表でかんがえがかわったんだけど、②だんらくがないと、かこ、げんざい、みらいがきえるということで考えが変わりました。（孝弘）

ぼくは、考えが変わって、②だんらくがないといけないと思うんだけど、それは、②だんらくは、じだいをこえて、多くの人々のくらしにやくだってきたのです。とかいているから、②だんらくでぐたいてきにれいを出して説明しないと、④だんらくでこのようにと、はっきり言えないんじゃないですか？（明宏）

今日の優さんのはっぴょうで、太田さんは、④だんらくの「このように、たくさんの絵文字が使われているのは、なぜでしょうか。」の「たくさん」に①～③まで、さまざまな絵文字をかくため長くかくのだとはっけんしました。（茉莉奈）

（『3年国語通信第七八号』）

こうして「発見カード」に書かれたことが『国語通信』をもとに共有されていくことによって、子どもの中から、〈資料2〉〈資料3〉のように、自主的な学びが連続的に生み出されていった。

資料2

今日は、自分が書いた説明文と筆者が書いた説明文の書き方を比べて、自主学習の中で発見を生みだした人のノートを紹介しましょう。／今、太田さんの「くらしと絵文字」を読んで、説明文の勉強をしています。太田さんは、絵文字の特長を三つあげています。／

①見たしゅんかんに意味が分かる。／②相手に親しみや楽しさを感じさせる。／③言葉や年れいなどをこえて分かる。／私は、自分でさがした絵文字の中で、会社のマークや家の紋などの特長として、／④名ふだのようなはたらきをするということがあると思います。私がさがした絵文字は、それら四つの特長のどれかにあてはまっていることが分かりました。説明文では、説明しようとするものの特長をうまくひょうげんする事が大事だと思います。そのための太田さんの工夫をさぐっていきたいです。（佳子）

佳子さんが言うように、説明文は、筆者が読み手に何か伝えたい、うったえたいことがあって、それを効果的に表現するために、れいの出し方やれいのじゅんじょのならべかたなどに工夫をこらしているのですよね。「くらしと絵文字」の学習では、そうした筆者の説明の仕方や工夫に対して、自分はどう考えるのか、自分の考えを出していきましょう。

（『3年国語通信第七九号』）

資料3

今、国語では、「くらしと絵文字」の太田さんの説明の工夫を見つけていますね。／彩花さんは、自主勉強で上のような学びをしてきました。／彩花さんは、「しゅんかん」という言葉に注目することによって、太田さんの説明の仕方の工夫（むずかしい言葉で論理展開の工夫といいます）をしっかりと読み取っていますね。／さあ、みなさんは、どんな説明の工夫を読み取ることができるでしょうか。／⑤⑥だんらくで、太田さんの工夫しているところはどこ？／「しゅんかん」という言葉は⑤⑥だんらくに3回も使っているのがヒントだ！　この学習方法を使って書いてみます。そのしゅんかんを3回使っていることから、ウとエの絵文字は、しゅんかんに見てわかる絵文字だということがすごくわかります。／そこから私は、太田さんのすごい工夫を発見しました。／それは、⑤で説明していることをそれにつけくわえ、⑥だんらくでれいをあげて説明している所です。／⑤しゅんかんにその意味がわかる。→⑥れいをあげる。

（『3年国語通信第八一号』）

このように、「発見カード」を『国語通信』に取り上げることによって、他の子どもたちのさらなる学びが生まれ、さらにそれを各自のノートに書くという営みを通して、学びが連鎖していったのである。

三　発見カードの機能

「発見カード」という書くことの日常化がどのように学びに機能していくのか改めて考えてみよう。

まず、前項で述べたように「発見カード」を子どもたちが毎日授業の最後に書き続け、教師がそれを『国語通信』などに活用しながら、子どもたちに働きかけることによって、子どもたちは、自分の学びを対象化することができるようになるということである。

次に、「発見カード」を書くという営みが〈資料1〉の孝弘や明宏のように、新たな学びを起こすように働きかける。つまり、新たな問題意識を持ちながら学びに取り組むことができるようになるということである。

さらに、「発見カード」を書くことによって、〈資料1〉の彩花や久実、美希のように、他者の考えから自分の考えを深めることを自覚化していくということである。

こうした営みが、学びとは他者との共同の中で作用し合いながら起こっていくのだということを子どもたちに自覚化させていく。そして、子どもたち同士の水平的かかわりを活性化していく。

しかも、「そうか、そういうところに着眼して学べばいいのか」という学び方を獲得することもできるようになる。

こうして他者（友だち）の学びと自分の学びを比べながら、新たな発見をしながら、子

どもたちは、〈資料2〉や〈資料3〉のように学びを深化させていくのである。

「発見カード」の活用に慣れてきた段階で、私は、授業の導入で、前時の「発見カード」に書かれていた発見や疑問点を子ども同士が発表し合うという活動を取り入れるようになった。まさに、子どもの側からの問題意識に基づいて学びが開始され、学びへの意欲がさらに喚起されていった。

四 「発見カード」における書くことの日常化から見えること

毎日の授業終了時のわずか三分か五分の中で行われた、「書く」という営みが、上述してきたように、子どもの学びの振り返りに生かされ、自らの学びを自覚化するとともに、他者の学びも促進し、新たな学びの課題や学び方を提示していくのである。

この「発見カード」は、一単元の終了時には十数枚、一年間の終わりには、何十枚となって蓄積されていく。その積み重ねを振り返ったとき、子どもたちは自分が何をどのように学んできたのか、自らの学びの成長を実感し、その言葉の束に自らの学びへの成就感を感じとるであろう。その実感と成就感が子どもの次なる学びを促進していく。

「発見カード」という、ささやかな書くことの日常化が、子どもの学びに大きな成果をもたらしていくのである。

一方、教師である私は、このように子どもから毎日生み出されていく「発見カード」を通して、子どもの学びの事実を突きつけられ、多くのことを学ばされた。

子どもはこんなふうにつまずいていくのか。授業の中では何も言葉を発しなかったこの子がこんな問題を捉え、感じていたのか。この子のこの感じ方を生かしていくためにはどんな授業を構築しなければならないのだろうか。子どもの学びの論理に沿った授業構築のあり方を痛切に教えられた。私はこの子のこの思いを授業の中で受け止めることができなかった。こうした子どもの思いを受け取ることのできる教師にならなければ、子どもの側に立った授業の実現は難しい。……。日常化された「発見カード」を前に、私は教師として自問自答を続けることとなった。

また、「発見カード」に記された言葉の一つ一つに子どもの願いや思いや憤りが伝わってくるようで、現実の子どもの思いの重さを痛感した。その子どもの声に気づかなかった教師としての自分の無力を反省させられた。

結果的に、「発見カード」における子どもの記述は、私の授業改革につながっていった。と同時に、子どもの「発見カード」の言葉に促されるように、教師である私も『国語通信』や『学級通信』を書くことを日常化させていくこととなった。

書くことの日常化は、子どもだけでなく、教師にとっても非常に重要な意味を持っている。それは、教師の営みの振り返りであり、自己凝視でもあり、新たな課題の発見でもあるのだ。

私の授業が子どもとともに創り上げる授業に少しでもなり得ていたとしたら、それは、子どもが書き続けてくれた「発見カード」のおかげであったのではないだろうか。

継続は力なりである。全国の先生方にこの取り組みをお勧めしたい。

なお、本稿で取り上げた児童名はすべて仮名である。

かわの　じゅんこ　熊本大学教育学部准教授。専攻は国語教育学。博士（学校教育学）。「読むこと」、「話すこと・聞くこと」の領域を中心に、実践と理論を統合した実践理論を構築しようとしている。